ラファイエット侯爵とフランス革命

小　林　良　彰

Ⅰ　ラファイエットについての常識
Ⅱ　宮廷貴族としてのラファイエット侯爵
Ⅲ　大領主としてのラファイエット侯爵
Ⅳ　自由主義貴族としてのラファイエット侯爵
Ⅴ　フランス革命の英雄になったラファイエット
Ⅵ　ラファイエット派のブルジョアジー
Ⅶ　ラファイエットの敗北と亡命
Ⅷ　大土地所有貴族としてのラファイエット
Ⅸ　七月革命の老革命家ラファイエット侯爵
Ⅹ　ラファイエット侯爵を通じてフランス革命の基本的結果を考える

Ⅰ　ラファイエットについての常識

ラファイエットは世界史の教科書や初歩的なフランス史の概説書において，フランス革命の最初の革命家として名前がでてくる。彼はアメリカ独立戦争に参加してジョージ・ワシントンの親友であったことから，「両世界の英雄」と呼ばれた。バスチーユ占領直後，ラファイエットは国民軍（国民衛兵）の司令官として，フランス革命の軍事力を代表する存在となり，フランス革命を象徴する人物となった。

その後どうなったか，これがほとんどの書物に書かれていない。すこしくわしいフランス革命史では，彼が1792年8月10日の武装蜂起，すなわちチュイルリー宮殿襲撃事件に際して，これに対立する側に立ち，敗北して亡命したことが書かれている。つまり，つぎにくるジロンド派政権に対立

し，これを阻止しようとしながら失敗して逃亡し，国内では反革命の烙印を押され，逃亡先のオーストリア軍からは国王への反逆者として手荒く扱われたことが書かれている。

その後の足どりはほとんど書かれていないが，1830年の七月革命のところで，すこし詳しい書物ならば，またもやラファイエットが革命軍の側に立って一時期七月革命の指導者としてかつがれ，彼がオルレアン公爵ルイ・フィリップを新国王に迎えて，七月王制を樹立させたことを書いている。

これらをつないでいくと，ラファイエットは，フランス革命をバスチーユ占領から1830年の七月革命まで通して観察し分析するときに欠かすことのできない人物であることが推測できる。そこでラファイエットを通して見たフランス革命論を書こうとするのであるが，その焦点を特殊ラファイエットの人生にあてるのではなくて，フランス革命の本質，「結局フランス革命で何が実現したのか」を究明するところに当てようと思う。

したがって，ラファイエットのアメリカ独立戦争における活躍の詳細については省略し，また彼の個人的な交友関係や行動についてもふれないことにする。ここで問題にしたいのは，「フランス革命とは何か」をラファイエットという重要人物の歴史を通じて論究することである。

II　宮廷貴族としてのラファイエット侯爵

ラファイエット侯爵は高級貴族の生れである。したがって，平民でもなければ普通の貴族でもなく，彼の結婚契約書を読んでいると，「高貴で強力な」領主という言葉が，彼の側にもまた妻の側にもくりかえし使われている。つまり，日本でたとえていうならば，江戸時代の大名に相当するような存在であり，生れながらにして他の人間とはちがう扱いを受けていた。

こうした人物がフランス革命の英雄として活動するという点について，十分に認識しておかなければならない。まず，彼の高い家柄の意味を具体的に紹介していきたい。

ラファイエット侯爵は，1757年にブルターニュ貴族の父とオーヴェルニュ貴族の母親の間から生れた。正式の名前はマリー・ジョセフ・ポール・イヴ・ロッシュ・ジルベール・デュ・モチエ・ド・ラファイエット侯爵 Marie-Joseph-Paul-Yves-Roche-Gilbert du Motier Marquis de La Fayette という。母方の祖先には，15世紀の元帥になった人物がいて，またルイ13世の愛人であったルイーズ・ド・ラファイエットがいた。父も母もともに侯爵家の出身であり，結婚のつり合いはとれていた。

父親は彼が2歳のときに戦死した。そのため，祖母や叔母の所で育てられた。収入が少いというので，国王から780リーブルの年金をもらっている。彼の母親は息子を宮廷に入れるためにパリに住み，11歳になると息子をパリに呼びよせて教育した。彼は14歳で王の銃士となり，16歳でノアイユ連隊の将校になった。[1]

ノアイユ連隊に迎えられたことには特別な意味があった。ノアイユ公爵家 Noailles はフランス王国の最高貴族の一つであり，家長はノアイユ公爵，元帥であった。その長男が別名エヤン公爵 Ayen と称し，陸軍少将でノアイユ連隊の司令官をしていた。このエヤン公爵が自分の連隊に迎え入れ，ラファイエット侯爵を自分の次女と結婚させようと考えた。

ラファイエット侯爵が16歳6カ月，ノアイユ・エヤン公爵の次女が14歳と5カ月で結婚し，結婚式にはブイエ侯爵 Bouillé，パリの総司教ポール・ド・ミュラ，ムーシ公爵 Mouchy，テッセ伯爵 Tessé，ラリヴィエール伯爵 La Rivière など，それぞれの血縁の名門貴族が立ち合った。妻は20万リ

1 Étienne Charavay, *Le général La Fayette, 1757-1834*, Slatkine-Megariotis Reprints, Genève, 1977, pp. 1-2.

ーブルの持参金を持ってきた。はじめはノアイユ公爵家の邸宅に住み，のちに独立し，夫婦で宮廷に出て王妃の舞踊会に毎週出席した。[2]

1786年に国王ルイ16世がシェルブールに行幸したとき，王を取り巻く最高の貴族達，すなわち海軍元帥カストリ公爵 Castries，ポリニャック公爵 Polignac（その夫人が皇太子養育係になった），モルトマール公爵 Mortemart の集団にラファイエット侯爵も参加した。[3]

フランス国王のみならず，ヨーロッパ諸国の国王と高級貴族にも，簡単に会見できる立場にあった。1785年プロイセン（プロシア）王国の軍事演習を見学するために，彼はシレジェン（シレジア）に出かけ，ここでプロイセン国王フリードリッヒ二世とその王妃をはじめ，有名なブラウンシュヴァイク公爵（ブルンスヴィック），メレンドレフ伯爵など，のちにフランス革命軍を相手にして闘った軍隊の最高司令官に面会し，食事をともにした。またイギリス国王の次男ヨーク公爵とも会談した。[4] ラファイエットはアメリカ独立戦争に参加し，ヨーク公爵はイギリスを代表しているから，本来ならば敵対関係にあるはずであるが，高級貴族同士の会見はそうした国家間の敵意を越えていた。

つぎに，彼はオーストリア帝国の都ウイーンに行ったが，ここでは彼の妻の叔父のノアイユ侯爵が駐オーストリア大使をしていたので，その紹介でオーストリア皇帝ジョセフ二世に閲見することができた。オーストリア皇帝はとくに彼を丁重に迎えて，長時間の会談をした。[5]

このように，ラファイエット侯爵はヨーロッパ諸国の君主，高級貴族と交友を深めることができたが，フランス王国における官職という意味では，あまり大きな役割を与えられなかった。1788年，すなわちフランス革

2 *Ibid.*, pp. 4-6.
3 *Ibid.*, p. 131.
4 *Ibid.*, pp. 118-123.
5 *Ibid.*, p. 123.

命の前年には，歩兵族団長の職を持っていただけである。[6] この立場は，当時の宮廷貴族としては，冷遇された状態である。優遇されている者は軍隊の官職と，行政の高級官職，それにヴェルサイユ宮殿における高級官職を持ち，権力と高額の収入を国王から与えられていたからである。

中央権力でこのていどの役割に過ぎなかったラファイエット侯爵でも，地方では大きな政治力を持っていた。それは本人が政治権力上の地位を持っていなくても，自分の代理人，自分が引き立ててやった官僚をつうじて行使できた。それを物語るのがつぎの実例である。

ジャン・バロン Jean Baron は高級貴族の保護，引立てを受けて上昇し，下級貴族に列せられた商人の家系であり，ラファイエット侯爵のブルターニュにおける領地の領主権徴収係責任者であった。高級貴族のお気に入りになると，国税（領主権とは別で国家，国王に納めるもの）徴収についての特権が与えられる。それを利用して，カンタン市 Quintin の負担する租税を 1,500 リーブル減額してやった。そのお返しに，市は彼に 1,000 リーブル相当の黄金の箱を賜った。[7]

つまり，ラファイエット侯爵の執事のような人物が引き立てられて租税徴収の権力をもち，ある地方公共団体の税金を減額してやり，そのお礼に賜物をもらっているのである。

Ⅲ 大領主としてのラファイエット侯爵

宮廷貴族が国王を取り巻いて権力の指導権を独占していた。ノアイユ公爵の一族がその実例であり，ラファイエット侯爵もその縁に続く者であった。こうした当時の権力者，すなわちアンシャン・レジームの支配者は領

6 *Ibid.*, p. 157.
7 Jean Meyer, *La noblesse bretonne au XVIIIe siècle*, Paris, 1966, p. 373.

主であり，フランスのばあいそれが大領主であったことは，私が昔から指摘しつづけてきたことである。私が指摘する以前においては，この認識が一般的ではなく，宮廷貴族が領地をもっていなかったと主張する人が多かった。そこで今回は，これをラファイエット侯爵についても証明する必要がある。この証明は，あるでいど断片的にならざるをえないが，以下にその事実が列挙されうる。

ラファイエット侯爵は南部オーヴェルニュのブリュード Brioude 地区のシャヴァニャック城 Charaniac に生れた。[8] また彼が父親から相続したものに加えて父方の伯父から12万リーブルの収入のある領地を13歳で相続した。[9]

彼は20歳のときには，ブルターニュにおいて6万リーブルの収入を領地からあげていた。彼がアメリカ独立戦争に参加するための費用をまかなうために，この中の土地を売却した。ラトゥーシュ La Touche (72,000リーブル)，プルック Ploeuc (150,000リーブル)，ペリネ Pelinet (120,000リーブル)，リスル・アヴァル Lisle-Aval (9,000リーブル) の領地と，ドレー・ボマノアール市 Dorée Beaumanoir (121,000リーブル) であった。ただし，1783年彼の手元にはまだ176,000リーブルに評価される領地が3カ所あり，さらにそのうえ3つの領地があって，そこから年収24,000リーブルの収入があげられた。[10] この中の一つはプレロ Plélo の領地であった。[11]

彼の1777年における収入はつぎのようになっている。[12]

8 E. Charavay, *op. cit.*, p. 1.
9 *Ibid.*, p. 3.
10 *Ibid.*, p. 116.
11 J. Meyer, *op. cit.*, p. 870.
12 E. Charavay, *op. cit.*, p. 560.

ラファイエット侯爵の年収 (1777年)

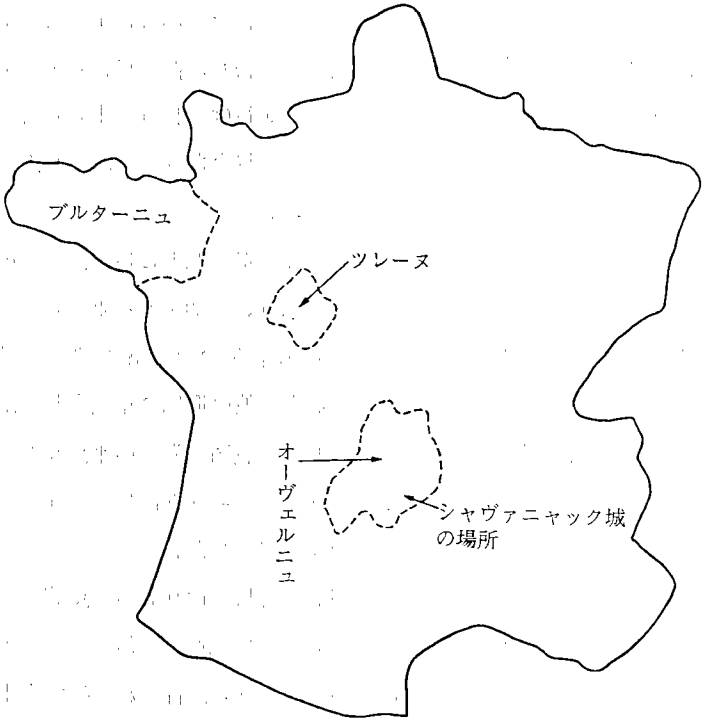
A	オーヴェルニュ州の領地	15,000	リーブル
B	ツレーヌ州の領地	13,000	〃
C	ブルターニュ州の領地	60,000	〃
D	祖父ラリヴィエール侯爵の遺産 (領地と金利収入)	24,000	〃
E	金利収入 (ブルターニュ州地方自治体, 僧侶, インド会社, トレモアイユ公爵, モンモランシー公爵から)	16,000	〃
F	ラファイエット夫人の持参金収入	9,000	〃
G	ラマルク邸の収入	9,000	〃
	計	146,000	〃

この収入は税引後の収入であるが, 総収入のうち, 領地からの収入がA, B, C合計して60%になる。Dにも領地からの収入, 領主としての収入が含まれているから, ラファイエット侯爵の年収のうち半分以上が領主としての収入, 領地からの収入によって成り立っていることがわかる。

1786年, すなわちフランス革命の三年前に, 彼はオーヴェルニュのランジャック Langeac の領地を188,000リーブルで買入れた。これをシャヴァニャック城に合併して大領地とし, 公爵領に昇格させる野心をもっていたといわれている[13]。当時のフランスではそれぞれの爵位にふさわしい領地の規模があり, たとえば伯爵から侯爵, 侯爵から公爵に昇格するためには, それ相応の領地を増やさなければならなかったのである。ただし, ラファイエットの公爵に昇格する野心は実現されなかった。

いづれにしても, 彼はフランスの西北部 (ブルターニュ) と中部 (オーヴェルニュ) に大領地を持ち, 中西部のツレーヌ州にも領地を持つ大領主であることはたしかである。この事実は, 宮廷貴族が大領主であったことを証明するための根拠になる。その領地が一カ所にまとまるものではなく, 各地に分散していて, 領地の飛地所有であることも実証したことにな

13 *Ibid.*, p. 133.



第1図　ラファイエット侯爵の領地と城のある州

る。(当時，職人，労働者の日給が1リーブル前後であったから，1リーブルを1万円相当にみなすと，1万リーブルは1億円となり，ラファイエット侯爵の年収は約14億円となる。もちろん，物価体系がまったく異るので，この比較はあくまで目安にすぎないが，これである種の概念を得ることができる)。

Ⅳ　自由主義貴族としてのラファイエット侯爵

こうして，彼が領地を持ち城を持ち，そして国王やヨーロッパ諸国の王

侯貴族と容易に交際できる名門貴族であることはわかったが，もしそれだけならばフランス革命の革命家にはならず，むしろ保守派として，反革命の側に立つべき運命を持っていた。ところが彼は，自分の生れた身分，階級から離れて，その中における改革派，革新派となり，それから進んで自由主義貴族，貴族革命家に変身していった。

つまり，どこか彼の周囲の宮廷貴族とはちがったところがあったのである。その違いを今からたどっていこうと思う。1783年オーヴェルニュで食糧飢饉がおこった。ラファイエット侯爵の領地の領民達が救済を請願した。ラファイエット侯爵が城に到着すると，彼の領地の年貢徴収係が小麦でいっぱいになっている倉庫を彼にみせて，「侯爵様，いまあなたの穀物の売りどきでございます」といった。ラファイエット侯爵は，「いやいまはそれを与える時だ」といって，貧民に分配させた。[14]

これからみると，ラファイエット侯爵は善政を行う名君，慈悲深い領主ということになる。もし宮廷貴族すべてがこのような領主であったならば，フランス革命が起るはずはないから，こうした行為が，彼を自由主義貴族の側に立たせる潜在的要因になった。

彼は宮廷貴族として不適当な素質をもっていたようである。背は高いが赤毛であり，ダンスが下手で，その不器用さを王妃マリ・アントワネットにあざ笑われた。酒が飲めなくてこれを苦にしていた。当時の宮廷では，酒に強いことが評判を良くする原因であったようで，とくに彼は妻の従兄のノアイユ子爵の飲みっぷりの良さにたいして劣等感をもっていた。[15]

赤毛はなぜか西洋では嫌われ遠ざけられる原因になる。それに加えて酒に弱くダンスが下手であるから，当時の宮廷でうまく立ちまわれない。こうしたこともまた，彼が宮廷から飛びだす原因になったと思われる。

---

14 *Ibid.*, p. 97.
15 *Ibid.*, p. 6.

やがてアメリカ独立戦争がはじまった。これが青年貴族の中で話題になり，ラファイエット侯爵はすぐに独立運動に共鳴し，1775年アメリカ大陸へ渡ろうとした。長女が生れたので妻は引きとめたが，それでも彼は準備を進めた。もちろん彼だけではなくて，オルディ伯爵，カルプ男爵など，何人かの青年貴族が仲間になった。政府は出国を禁止していたが，彼は政府をだましてボルドーまで行き，政府から逮捕状がでると，変装して脱出し，アメリカ大陸に着いた。[16]

彼を保護していたノアイユ公爵（エヤン公爵・妻の父）は怒り，駐英大使をしていたノアイユ侯爵（妻の叔父）は非常に嘆いた。[17]

1778年ボストン港を出て，アメリカからフランスに帰り，帰国後8日間の自宅監禁に処せられただけで，フランス国内では大歓迎された。王妃マリ・アントワネットが，彼にたいして竜騎兵一連隊を8万リーブルで買い入れることを可能にし，彼に連隊長の地位を与えるために尽力してくれた。こうして，22歳でラファイエット侯爵は，アメリカとフランスで英雄になった。[18] 3年間でフランスの世論が変化したためである。

その後，彼はアメリカへの派兵を実現するために政府にたいして働きかけ，1780年軍隊を率いて出発し，アメリカ大陸に上陸し，ワシントンとともにイギリス軍を相手に戦闘を続けた。[19] 帰国後も，新生アメリカとの通商拡大のために努力し，三度目の渡米で大歓迎を受け，1785年フランスに帰ったが，フランスでもフランス革命を前にした政治的動揺がはじまり，彼はすぐに州の三部会に出席することになった。[20]

1786年名士会（名門貴族の会）が開かれた。このとき彼の名前は一度載

16 *Ibid.*, pp. 6-12.
17 *Ibid.*, pp. 13-14.
18 *Ibid.*, pp. 41 et 45.
19 *Ibid.*, pp. 52 et 57.
20 *Ibid.*, pp. 107 et 117.

せられ，つぎに削除され，さらにそれが回復された。すでに，彼にたいする宮廷側の複雑な扱いがはじまっている。[21] 会議がはじまると，彼は当時の財務総監カロンヌにたいする反対派となり，財政赤字の原因としての王領地の不正交換を批判し，王弟アルトワ伯爵と対立した。王領地の不正交換とは，有力宮廷貴族の利益のために，その持っている領地を不当に高く見積って国王が買入れてやることである。このことによって，国王の財政すなわち国家財政はやせ細り，不等価交換をしてもらった有力貴族は収入を増やすことになる。これを批判したのである。

具体的には，ロアン・ゲメネ大公 Rohan-Guéméné が賭博で巨額の借金を背負って破産したとき，彼の領地を不当に高く評価して，国家資金による買入れをしてやったことである。大公の領地の評価が6～7百万リーブルであったのに，その約2倍の価格で買入れた。この不正をラファイエット侯爵が激しく糾弾した。[22]

財務総監カロンヌが辞職したあと，後任の財務総監は印紙税を提案したが，これにたいしてもラファイエット侯爵は反対し，財政再建を審議するには一つの国民議会が必要であると宣言した。これには議長のアルトワ伯爵が仰天して，「なんと貴殿は三部会の召集を要求するのか」といったところ，ラファイエット侯爵は「殿下そうともいえますが，それは三部会よりももっとよいものです」と答えた。[23]

このあと，ラファイエット侯爵はアメリカのワシントンにたいして，つぎのような手紙を書いた。「国王とその家族，そしてそれを取りまく大領主達は，何人かの私の友人を除いて，私が国民の貴族以外の中で得た成功と私の唱える自由について，決して私を許さない」。[24] これは，彼が自分の

21 *Ibid.*, p. 136.
22 J. Meyer, *op. cit.*, p. 872.
23 E. Charavay, *op. cit.*, p. 145.
24 *Ibid.*, p. 149.

出身階層である大領主，国王を取りまく宮廷貴族の群から離れて，きわめて少数の者とともに他の勢力の側に立つにいたったことを物語っている。

1787年ブリエンヌ大司教が財政審議委員会の議長（実質的に首相と蔵相を兼ねた権限をもつ）となり，二十分の一税増徴を決定したところ，それにたいする反対運動をラファイエット侯爵が続けた。政府の側が反対運動を弾圧するために設立した臨時法廷にたいしても彼ははげしく反対し，王妃に反論した。このため，ラファイエット侯爵は，軍隊における旅団長の職を罷免された。[25]

第二回の名士会が開かれて，三部会の召集の形式が議論されたとき，ラファイエット侯爵は第三身分の人員増を提案し，8対17で敗北した。[26] つまりこの時点でも，彼は貴族の中の少数派に止まっていることがわかる。ただしこの後に続く全国的な騒乱の圧力をうけて，政府の側が譲歩し，現実にはラファイエット侯爵の提案する人員倍増が実現された。

つぎに三部会の選挙がはじまったとき，彼を第三身分の代表者として選出しようという意見も多かったが，貴族部会で393票のうち198票をとり，貴族部会代表者として選出された。[27] 三部会が召集されると，今度は人数別採決を主張して第三身分の側を擁護したが，貴族部会では188票にたいする47票の少数派にとどまった。[28] ここでもまだ，彼が貴族階級の中の少数派にとどまっていることがわかる。

V　フランス革命の英雄になったラファイエット

やがてラファイエット侯爵は，フランス革命の英雄に祭りあげられるの

25 *Ibid.*, pp. 155 et 159.
26 *Ibid.*, p. 160.
27 *Ibid.*, pp. 162-165.
28 *Ibid.*, p. 170.

であるが，彼の実際の行動は，むしろこれからバスチーユ占領にむけて減速にむかう。まず第三身分の議員が「国民議会」と自称し，これに貴族部会と僧侶（聖職者）部会が合流した6月27日には，彼はただついていっただけで，投票にも参加しなかった。

租税徴収権を国民議会が宣言するため討議しているとき，ラファイエット侯爵は人間の権利宣言を提案した。

その後，彼は王族オルレアン公爵と王弟アルトワ伯爵の双方を非難した。オルレアン公爵はバスチーユ占領の群集を保護する立場であり，アルトワ伯爵は王弟として，宮廷を群集の弾圧へもっていこうとした人物である。ここで，ラファイエットはバスチーユ占領の側に立つのではなくて，両者の調停役を買って出ようとしたふしがある。[29]

7月11日ネッケルが罷免され，それが引き金となって国王軍とパリ市民の衝突が起きた。バスチーユ占領の前日，すなわち7月13日，ラファイエット侯爵は国民議会の副議長に選出された。7月14日，人間の権利宣言を提案したが，これは憲法に盛りこむべきものという根拠から反対された。

その夜，バスチーユ占領の報道が伝わり，ちょうど議長が不在であったので，ラファイエット侯爵が議長になってパリ市民の代表を迎えた。ただし，彼の発言は，不幸な事態を静めることと，国王軍の撤退に努力するというものであって，必しも反乱に賛成したものではない。翌日，他の委員とともに国王に会見し，続いてパリへ出かけた。パリでは他の議員とともに大歓迎を受け，彼は反乱で出来上ったばかりのパリ民兵の総司令官にパリ市選挙委員会から選ばれた。このパリ民兵が，国民軍（国民衛兵）に発展し，ラファイエットはその長に就任した。[30]

彼にとってはここまでがフランス革命であり，以後は運動の行きすぎを

29 *Ibid.*, p. 172.
30 *Ibid.*, pp. 174-178.

一方で押えつつ，新憲法制定と，ある種の改革を提案する立場に立った。まずバスチーユ占領をめぐる軍事的対立で，宮廷側に立った貴族の何人かが殺されそうになったとき，彼らを助けた。

助けられた人の名前はサン・フィルマン司祭 Saint-Firman，ホワジュラン男爵 Boisgelin などである。フーロン Foulon とベルチエ・ド・ソヴィニ Berthier de Sauvigny の虐殺は有名であるが，これは彼が止めようとして成功しなかったものである。その直後彼は辞職を申し出たが，留まるように頼まれ，結局辞職を撤回した。パリを攻撃した国王軍の司令官ブザンヴァル男爵 Bezanval が群集に捕えられたときも，この釈放に努力して成功した。

8月4日の封建的権利（領主権）の廃止宣言には関与しなかった。つぎに8月12日国民軍司令部の副司令官の任命をおこない，彼のアメリカ独立戦争時代の副司令官を任命した。奉給を国民議会が12万リーブルだすと決議したとき，その受取りを拒否した。10月5日ヴェルサイユ行進へむけての運動が起きたときには，雄弁をふるってこの動きを止めようとしたが失敗し，結局その行進に従ってヴェルサイユまで行った。群集が国王一族を脅かしたとき，彼は群集をなだめてその危機から救い，国王一族から感謝された。[31]

ただし国王一族と議会は群集に強要されてパリに移転したから，外部からみればラファイエット侯爵が国王一族をパリへ護送したような印象を与えた。この年の12月，ファヴラ侯爵 Favras による王権回復のための武力行動の計画があり，逮捕，処刑された。この事件については，王党派がファヴラ侯爵の死刑について，ラファイエット侯爵に責任があると非難した。[32] 翌年の2月，彼は自分の信念を公表したが，その中で「旧体制は奴隷

31 *Ibid.*, pp. 184-190.
32 *Ibid.*, p. 207.

的なものであり，このばあいは反乱が神聖なる義務である。しかし新憲法については，「これを愛し，これを信頼し，守るべきである」といった。他方で，国民議会が10万リーブルの手当を与えるといっても，改めてこれを拒否した。[33] 6月19日貴族の称号が廃止されたが，これについて彼は積極的に賛成した。[34] 以後，本論文でも侯爵を付加せずに，単なるラファイエットと書くことにする。

VI ラファイエット派のブルジョアジー

1790年6月17日，ラファイエットは，バイイ，シエイース（副司教），ミラボー（伯爵），タレイラン（司教）などとともに「1789年協会」を設立した。この団体がフランス革命の第一段階の指導権をにぎり，この派閥をとくにラファイエット派と呼んだ。のちにジャコバンクラブのラメット派と合同してフイヤンクラブを結成し，立法議会の指導権をにぎった。

この動きを表面的にみると，自由主義の名門貴族と一部の高級聖職者（僧侶）に加えてバイイのような政治家が顔をだすだけであり，その集団の本質は必しも明らかではない。もし表面だけをみるならば，フランス革命とは，宮廷貴族にたいしてラファイエット派の自由主義貴族が対決したもののようにみえる。これでは，フランス革命が貴族対貴族の対決として理解されてしまう。

しかし，もうすこし背後関係についての観察を進めると，ラファイエットを担ぎあげてフランス革命の指導権をにぎったブルジョアジーの実態が浮び上ってくる。まず，スタール男爵夫人 Staël はラファイエットの親友であったが，[35] 彼女は銀行家ネッケル Necker の娘であった。

33 *Ibid.*, p. 214.
34 *Ibid.*, p. 227.
35 *Ibid.*, p. 231.

テルノー Ternaux は3,000人を雇用する繊維工業の大工場主であったが，ラファイエット派の闘士となり，ラファイエットの失脚とともに亡命した。[36]

ディートリック Dietrich はアルザスの鉄鋼業者，領地の持主であったがラファイエット派の重要人物であり，革命直後ストラスブール市長に任命され，彼のサロンでラ・マルセイエーズが作曲された。彼もまたラファイエットの敗北と運命をともにした。[37]

ラボルト・ド・メレヴィユ Laborde もまたラファイエット派の重要人物であるが，商船隊の持主，植民地貿易の大商人であり，宮廷にも金を貸す宮廷銀行家であり，またメレヴィユの名を持つ領地（オルレアン地方）を所有する領主でもあった。[38]

大銀行家ペルゴ Perrqaux もラファイエットの国民衛兵における副官となり，腹心の人物になった。[39]

銀行家アベマ Abbema もラファイエット派の重要人物であった。[40] 銀行家ジョージ Jauge とコッタン Cottin はラファイエットの副官になった。[41] 銀行家ジョージは国王を護衛し，かつ監視する責任者になった。[42]

1789年協会には，そのほかボスカリ Boscary（大商人），ラヴォワジェ Lavoisier（総徴税請負人，ケース・デスコント理事，王立火薬製作所所長），デュフレーヌ・サンレオン Dufsrene Saint-Léon（宮廷銀行家，国

36 Charles Ballot, *L'introduction du machinisme dans l'industrie française*, Paris, 1923, p. 195.

37 *Ibid.*, 426, G. Bouchard, *Prieur de la Côte-d'Or*, Paris, 1946, p. 338.

38 R. Pernond, *Histoire de la bourgeoisie en France*, t. 2, Paris, 1962, p. 10.

39 B. Gille, *La banque et le crédit en France de 1815 à 1848*, Paris, 1959, p. 52, A Mathiez, *Autour de Danton*, Paris, 1929, p. 246.

40 J. Bouchary, *Les manieurs d'argents a Paris a la fin du XVIIIe siècle*, tI, Paris, 1939, pp. 120, 122 et 133.

41 *Ibid.*, t. 1, p. 111.

42 A. Mathiez, *Les grandes journées de la Constituante 1789-1791*, Paris, 1913, p. 67.

民議会清算局長), ユベール Hubert (銀行家, 株式投機業者) の名がみられる。

単なる人的結合だけではなくて, 血縁 (閨閥) による結びつきがある。それは, ペリエ Périer 家とラファイエットの孫娘の結婚であり, もちろんこれは後に実現されたことであるが, ここで先まわりして書いておく。これこそは自由主義の名門貴族とブルジョアジーの上層の結合の代表的な実例になるからである。

クロード・ペリエはフランス革命以前に工業家, 銀行家として成功し, 城と領地を買込み, 一代かぎりの貴族に昇格した人物であり, ブルジョアジーの成功者の代表であった。自分の城で非合法の州三部会を開かせて, フランス革命の開始に大きな役割を果した。一貫してフランス革命政府に協力し, 恐怖政治の時期でも政府と協力して, 安全に仕事をつづけた。[43] フランス革命が終るころには, 彼の息子達が大工業家, 銀行家として成功し, のちに世襲の貴族に昇格した。この家族のうち長男のオーギュスタン・ド・ペリエが大工業家, 貴族院議員となり, その子アルフォンス (大工業家) とラファイエットの息子ジョルジュ・ド・ラファイエットの娘が結婚したのである。[44]

こうして, フランス革命の英雄ラファイエットは, 一方で自由主義貴族に支えられながら, 他方でブルジョアジーの最上層 (それはときに貴族の資格を持ち城や領地を持つばあいがある) に支持された。自由主義貴族と上層ブルジョアジーの同盟を体現したものである。

---

43 F. Vermale, *Le père de Casimir Périer*, Grenoble, 1935, pp. 6-10.
44 Jean Louis Bory, *La Révolution de Juillet*, Paris, 1972, p. 81.

Ⅶ　ラファイエットの敗北と亡命

1790年7月14日，つまりバスチーユ占領の一年のち，シャン・ド・マルス広場で革命の祭典が開かれた。タレイラン（オータン司教）がミサを行い，そのあとラファイエットが国民軍を代表して宣誓し，国民と法律と国王にたいする忠誠を宣言した。群集が彼をたたえ，このときが彼の革命の英雄としての絶頂期であった。

やがてナンシー事件が起きた。貴族将校にたいして兵士がナンシーで反抗した事件であるが，これにたいしては，ラファイエットの従兄ブイエ侯爵が苛酷な断圧でのぞんだ。その処置をラファイエットが大いに称讃したので，ラファイエットにたいする反対が出はじめ，マラは「人民の友」の中でラファイエットをはげしく非難した。[45]

国王のヴァレンヌ逃亡事件に際しては，従兄のブイエ（侯爵）が国王の逃亡に加担したが，ラファイエットは国民議会の方針にしたがい，その直後陸軍中将に昇進した。[46]

ここで従兄弟同士が分裂したことになる。1791年7月17日，シャン・ド・マルスの虐殺が起った。王制廃止，共和制宣言を求める群集にたいして国民軍が発砲した事件であるが，これがラファイエットの責任であるとされて，彼の評判は急降下した。国民議会が憲法を発布し，1791年9月30日解散すると，ラファイエットはワシントンの例にならい隠退することを決意した。こうして，彼はオーヴェルニュの領地に帰った。[47]

オーストリア・プロシアとの戦争が近づくと，フランスは5万人の軍隊を編成する必要にせまられた。ルイ16世は，ラファイエットとロシャンボ

45　E. Chavaray, *op. cit.*, p. 244-246.
46　*Ibid.*, p. 272.
47　*Ibid.*, pp. 276-277.

ー，リュクネルの三人にこの指揮を依頼した。ラファイエットは，貴族将校の大部分が亡命した状態の軍隊を再建するために，非常な困難に直面した。やがて，1792年6月オーストリア軍に攻撃され，彼の副司令官グヴィヨンを失った。[48]

6月12日，ルイ16世がジロンド派系の大臣セルヴァン，ロラン，クラヴィエールを罷免し，フイヤン派系の大臣を任命したが，ラファイエットは国民議会に手紙を書いてこの処置を支持した。彼は，ジャコバンの党派が，すべての社会的混乱の原因であると批判した。[49]

当時のジロンド派はジャコバンクラブの指導者であったから，この時点でジャコバンクラブを批判することは，ジロンド派を非難することにつながった。このラファイエットの態度にたいして反対が高まり，ジロンド派政治家のコンドルセ（侯爵）はラファイエットを批判し，ロベスピエール，ダントンもラファイエットを攻撃した。[50]

6月28日，パリではフイヤン派にたいするジロンド派を含めたジャコバンクラブの対立が大詰をむかえ，そこに群集が動員されて国王の地位も危くなってきた。ラファイエットは軍隊を離れてパリに帰り，議会に出席して，混乱を静める方針を演説した。このとき，国民衛兵の大部分はラファイエット派についていた。[51]

7月に入って，ジロンド派将軍デュムーリエが到着し，ラファイエットと対立した。ラファイエットは軍隊を率いてパリに進撃する意見を口にしたが，これにたいしてロベスピエールは，ラファイエットが軍隊の頂点にいるかぎり，自由は危機に瀕していると演説した。[52]

8月4日，立法議会でラファイエット弾劾の提案がだされたが，406票

48 *Ibid.*, pp. 279 et 282.
49 *Ibid.*, p. 302.
50 *Ibid.*, p. 304.
51 *Ibid.*, p. 311.
52 *Ibid.*, p. 320.

対224票で否決された。[53] したがって，まだ立法議会では，ラファイエット派が多数派であったことがわかる。しかし8月10日の武装蜂起によって状況は一変した。ラファイエットの側であるフイヤン派は敗北し，国王を守る貴族将校団はチュイルリー宮殿で全滅した。8月15日，ラファイエットにたいして軍隊が服従しなくなった。危険を感じた彼は，8月19日，21人の貴族将校とともに敵軍のオーストリア軍の陣地に逃亡した。[54]

これ以後ラファイエットは捕虜となり，プロシア，オーストリアを転送され，一度脱獄を試みて失敗し，かなり手ひどい扱いを受けて監禁されながら，1797年に釈放されるまで，フランスとは無関係な立場にあった。[55]

Ⅷ　大土地所有貴族としてのラファイエット

1792年8月25日，立法議会はラファイエットの財産を没収して売却する法令を可決した。シャヴァニャック城のあるブリュードの土地は，1793年と94年に売却され，その金額は64万リーブルになった。[56] それでもまだブルターニュの土地が残っていたが，総裁政府にたいする彼の態度が友好的ではなく，また彼が帰国していないので，総裁政府はこの土地を売却することにした。[57]

そこで妻（ラファイエット夫人）が，まだ売れ残っている土地を保全するために急いで帰国した。ナポレオンがブリューメール18日のクーデタを起すと，ラファイエットは帰国した。これ以後，彼は妻の持っているラグランジュ城と，それに附属する土地に住むことになり，地方貴族として農業経営に従事した。この城と土地は，彼の妻が母親から相続したものであ

53 *Ibid.*, p. 324.
54 *Ibid.*, p. 329.
55 *Ibid.*, p. 365.
56 *Ibid.*, p. 339.
57 *Ibid.*, p. 366.

り，そこに建てられている城は12世紀に逆のぼる。ラグランジュ・ブレノ La Grange-Bléneau の土地は 36,000 フランの価値があり，その他ラファイエット夫人が相続した財産は，545,716 フランに達した。[58]

その後，1826年に亡命貴族の土地売却にたいする補償があり，ラファイエットはオート・ロワール県（南部オーヴェルニュ）にあった土地が売却されたものについて，325,767 フランの補償金を受取った。[59]

彼が受取った補償金の総額は，他県の土地の没収売却部分を含めて45万フランであった。[60]

こうして，フランス革命以後，ラファイエット侯爵は妻の土地に住む大土地所有貴族となり，自分の土地は売却されたが，それに見合う高額の補償を受けて，大金融資産の保有者になった。彼は動産所有と妻の不動産所有を合せて，大土地所有貴族とブルジョアジーの両面をほぼ対等に持つ人間になった。

この事実からいえることは，フランス革命で領主権が無償で廃止されたとしても，旧領主が大土地所有者として残ることができたという事実である。しかもその土地は，あるものは売られたが，あるものは売られなかった。ラファイエット侯爵の運命についていえば，自分の土地の大部分は売られたが，夫人の相続分については母親が保全したということができる。亡命しなければ，土地を保全できたのである。

また，もしラファイエット侯爵が早く帰国して，総裁政府に挨拶すれば，ブルターニュの土地は保全できたであろうということであるから，フランス革命と貴族大土地所有の関係についていえば，破壊的であったともいえるが，同時にそうではなくて，保存する側面もあったという結論になる。ひと昔まえの理論のように，フランス革命が貴族大土地所有にたいし

58 *Ibid.*, p. 378.
59 *Ibid.*, p. 454.
60 A. Gain, *La Restauration et les biens des émigrés*, tII, Nancy, 1929, p. 232.

て破壊的であったという側面ばかりを強調するのは行きすぎである。

ナポレオンの統治下では，彼は頑固に地方貴族の立場を守り通し，貴族院議員と駐米大使の申し出を拒否した。ただし，息子を軽騎兵の将校に入れて協力させた。ナポレオンからレジオン・ドヌール勲章を与えるといわれてもこれを拒否した。[61]

Ⅸ　七月革命の老革命家ラファイエット侯爵

ナポレオンは貴族の爵位を復活したから，これ以後再びラファイエット侯爵の呼び名が使われる。彼はナポレオンの百日天下のときには下院の副議長となり，ナポレオンが敗北したとき，外国軍と交渉するための臨時委員に加わった。その直後王制が復活し安定すると，またもやラグランジュ城に隠退し，復古王制には反対の態度をとり続けた。[62]

1817年下院の代議士となり，左派リベラル派の領袖になった。1821年当時の革命運動カルボナリ党（炭焼党）に同調し，かなりの危険をおかした。他方で，下院の演壇に立ち，政府の財政政策を攻撃し喧騒につつまれた。[63]

ギリシア独立運動を支援し，1824年の選挙では敗北し，一時アメリカ合衆国に出かけて各地で大歓迎を受けた。1828年議会が解散され選挙がおこなわれると，ラファイエット侯爵は，再び当選して下院議員になった。[64] この頃，ラファイエット侯爵は，国王シャルル十世の治安当局から，「革命派の策謀」の首謀者とみなされていた。ラファイエット侯爵以外に，タレイラン公爵，銀行家ラフィット，銀行家ペリエ，政治家ギゾ，チエールな

61 E. Charavay, *op. cit.*, pp. 380 et 391.
62 *Ibid.*, p. 410.
63 *Ibid.*, p. 413.
64 *Ibid.*, p. 418.

どがリストにあげられているが,[65] 七月革命以後の首相たちがここから出ている。

1830年5月16日シャルル十世は下院を解散した。このときの選挙では,ラファイエット侯爵は264票対72票の過去最大の多数票で当選した。国王シャルル十世と宰相ポリニャック大公は,この下院選挙を無効にしようとした。そこで七月革命の騒乱がはじまるが,ラファイエットはとりあえずパリに向って出発した。パリに着いてみると,すでにバリケード戦が起こっていた。[66]

この事態について,パリに到着した議員の何人かが集り,対策を協議した。ラファイエット侯爵は,7月28日,これが革命であると定義し,臨時政府を樹立する必要があることを主張した。翌日,彼は反乱軍を組織した「国民軍」の司令官を引き受け,彼の仲間の銀行家ラフィットの邸宅に同志を集めた。

7月30日,ラフィット邸に集った議員達が,下院においてオルレアン公爵をフランス王国全権に迎えることに決定した。この時点で,国王シャル十世と宰相ポリニャック大公の権力は失なわれた。ラファイエット侯爵はこの時期のもっとも重要な人物となり,もし政治体制が王制ならばオルレアン公爵が擁立され,共和制ならばラファイエット大統領が実現するだろうといわれた。武装蜂起した群集はオルレアン公爵に反感を持ち,「ブルボン家には反対だ」と叫んだ。ラファイエット侯爵がオルレアン公爵と抱き合うことによって,「オルレアン公爵万歳,ラファイエット万歳」という叫び声にかわり,こうして王族オルレアン公爵ルイ・フイリップを国王とする七月王政が成立した。[67]

---

65 David H. Pinkney, *La Révolntion de 1830 en France*, Traduit par Sauvigny, Paris, 1988, p. 62.

66 E. Charavay, *op. cit.*, pp. 456 et 468.

67 *Ibid.*, pp. 471-475.

このあと，ラファイエット侯爵は新政府とは少しちがった意見をだした。貴族院の世襲制，すなわち名門の大土地所有貴族が，親から子へとひきついで貴族院議員になることに反対した。むしろ，アメリカの上院のようなものがよいと主張した。現実の七月王政では，貴族院の世襲制が残ったから，ラファイエットの提案は，フランス社会にとって過激なほど民主主義的なものであった。そうした事情を反映してスタンダールは，「尊敬すべきラファイエットが我々の自由の錨である」と書いた。[68]

新政府と新議会は，ラファイエットの国民軍司令官の職を廃止し，これを内務省の管轄下に置き，ラファイエットは名誉司令官の地位にまつりあげられた。ラファイエットは辞職を申し出て，翌年1月に司令官の地位を去り，議員としてだけにとどまった。七月王政初代首相になった銀行家ラフィットを支持して，彼を下院議長につけさせたが，二代目首相兼内務大臣カジミール・ド・ペリエとは意見が合わなかった。[69]

カジミール・ド・ペリエは，ラファイエット侯爵の孫娘の夫アルフォンスの叔父にあたり，大銀行家，工業家，大炭鉱会社アンザンの大株主兼経営者であった。

ラファイエット侯爵はその後，ラグランジュ城が属するクルパレイ市の市長を引受けたが，3年後の1834年に死んだ。ラファイエット侯爵は七月革命の英雄にかつがれながら，その後につづく七月王政からはやや離れた立場に立った。七月王政は「オートバンク（上層銀行）の専制政治」と呼ばれる。ラフィット，ペリエがその象徴である。こうした時代をつくり出すために努力しながら，新政権とは距離を置き，やがて立ち去った。

68 *Ibid.*, pp. 478 et 489.
69 *Ibid.*, pp. 491-493.

X　ラファイエット侯爵を通じてフランス革命の基本的結果を考える

フランス革命を七月革命まで通してみて，結局なにが基本的な変化になったのか，つまりフランス革命とは結局なにであったのかを考えてみたい。多くの人が，それは領主権の無償廃止による小土地所有農民の形成であるといってきた。しかし，領主権が廃止されても，ラファイエット侯爵とその家族は，巨大な土地所有者として残った。その土地の内部には，小土地所有農民が形成されなかった。これは領地の中に直領地（直営地）があり，その土地は領主権廃止にもかかわらず，領主個人の所有物とみなされていたからである。

他方で最近フランスやイギリス，アメリカで盛んにいっている理論は，コバンのいう保守的大地主層の勝利とか，テイラーのいう非資本主義的富の勝利とか，あるいはフュレのいうようなフランス革命でめだった変化はほとんどなにもなく，単に文化的革命があっただけだという主張である。しかし，これにたいしてもまた反論することができる。ラファイエットの持っていた大所有地は，領主権廃止の影響を受けなかったが，亡命貴族財産の没収，売却で大きく傷ついた。もし妻の城と領地がなければ，彼は庶民の水準に転落するはずであった。もちろん約30年後に補償金が支払われたから，彼は巨大な金融資産の所有者に再生することができた。

この状態をもって勝利あるいは，変化なしといえるかどうかというと，それは無理なことである。やはり大土地所有は，あるていど傷つけられたというべきであり，傷つけられたけれども，全面的敗北・消滅ではなかったという程度のものである。全面的敗北でなかったからといって，あるいは生残ったからといって勝利あるいは変化なしというのはこじつけもはな

はだしい。

やはり領主，大土地所有貴族の側からすれば，彼らはフランス革命の勝者になったのではなくて，あるていど打撃を与えられながらも，かなりの部分を持ちこたえた勢力と定義することができる。

したがって，大土地所有者の勝利ではない。この面においては，あるていどの変化がみられただけである。ただし，これはフランス革命の本質的結果というのには，あまりにも個人の運命に左右される問題であるから，基本的結果に組み入れるには無理がある。

ラファイエット侯爵がいうように，フランス革命前の宮廷では，「国王とそれを取り巻く大領主達」が権力を握っていた。これに逆らえば，重要な官職をはく奪される。ラファイエット侯爵はこの階層の中に生れながら，この階層の主流からはずれた行動を取った。

その原因はあきらかではないが，ともかく彼が支配者の中の反主流としてきわだったことが，フランス革命の側の勢力から歓迎されて，フランス革命の第一段階で国民の英雄になった。そしてまた，彼がアメリカ独立革命にたいして心情的に傾倒し，フランスをそのように改造する熱意を持っていたことも，フランス革命の路線と一致した。

ところが，彼がその方向に踏みだしたとたん，彼を支持する特定の勢力が成立し，それが一方で自由主義貴族の一団となり，他方で上層ブルジョアジーの中の最有力者となった。ラファイエットは，この勢力が政治権力を握る状態でフランス革命は完成したと考え，これ以上に進むことは秩序の破壊であると考えた。

そこで，今度はそれ以上に革命を進めようとする勢力を弾圧する側にまわった。ジロンド派ですら，彼の目には秩序をみだし，祖国を危機に陥れるものと思われたのである。このときの争点の一つに，領主権の無償廃止がある。彼を支持する自由主義貴族も上層ブルジョアジーの有力者も，と

もに領地の所有者が多かったという事情を反映して，ラファイエットは，領地を維持した状態でフランス革命を終らせようとする勢力の側に立った。

彼の意志に反して領主権は無償で廃止された。しかし，それでも彼は大土地所有貴族として残った。彼が亡命したために土地を取りあげられたが，妻の土地に帰って大土地所有貴族，城主として残り，それだけでも彼は有力な存在であった。ナポレオン時代，彼がなぜ出仕しなかったかについては原因不明である。しかし，七月革命では再び貴族革命家として行動した。

ただし，バスチーユ占領のときもそうであるが，彼が運動をかきたて，武力行動を指導したのではない。彼は議会内での抵抗をしただけである。反乱が成功すると，その功績と知名度によって，反乱者の頂点に担ぎあげられた。その後は，反乱の暴走を止めながら，新政権を穏当な路線に止めようとする役割をになった。

こうして，最終的に七月革命を成功させるが，その中の有力者としては残らない。貴族院の世襲廃止を唱えて，より急進路線を進むから，新政権からは敬遠された。その意味では，彼は現実的な政治家というよりはむしろ，一種の理想主義者であった。

その理想が，バスチーユ占領や七月革命で政権を握った自由主義貴族と上層ブルジョアジーの利益に一致しただけである。その中で，上層ブルジョアジーの有力者と縁組を結ぶこともあり，名門貴族と上層ブルジョアジーの融合を進める範例を作った。これがフランス革命の基本的結果をみごとに示している。

結局，フランス革命以前の国家は，王を取り巻く大領主達の権力独占であった。それが，ラファイエット侯爵に象徴される自由主義貴族と上層ブルジョアジーの連合権力に置き換えられた。つまり，打破され，敗北した

者は，領主の権力独占であり，そのあとに上層ブルジョアジーが割り込んできて，領主，貴族と対等の地位に立った。これをいやだという者は亡命したり，地方に帰って権力から離れ，それで良いと考える貴族，領主，大土地所有貴族だけが自由主義貴族として協力した。こうして，新時代では，この両者の同盟が権力を動かしていく。その過程で，縁組によって現実に両者が融合し，貴族であるとかブルジョアジーであるとか定義できないような混合体になってしまう。これがフランス革命の基本的結果であり，フランス革命を市民革命の典型とみなすならば，市民革命の基本的法則はこのようなものであるということができる。

かつていわれたような，領主権の廃止による小土地所有農民の形成とか，上層ブルジョアジー，特権商人，特権的商業資本の敗北とか，その他議会制民主主義の確立とかいう法則は間違いである。

このようにフランス革命の結果についてこだわるのはなぜかといえば，フランス革命の結果，そして市民革命の法則をどのように定義するかということが，我国の明治維新の性格を考えるうえで，あるいは世界の市民革命を考えるうえでの重要な基準になるからである。ただし，それがどうかかわり合うのかについては，ここで論究するだけの紙数の余裕がないので，私の他の論文，著書を参照してもらいたい。